

### 3 ほ乳類モニタリング調査

#### (1) ホンドテンモニタリング調査

##### ア ホンドテンについて

生物多様性の復元をほ乳類の視点から評価するため、中型ほ乳類のホンドテン（以下、「テン」とします。）に着目し、林道等にテンが排泄した糞をサンプルとして回収し、内容物等を分析する取組を行っています。

テンは、大型猛禽類のように生態系の頂点に立つ種ではありませんが、①行動圏が数ha～数十haで林小班単位的环境変化と密接な関わりがあること、②河川、山地など平面的な広がりのほか、樹上という3次元の活動範囲を持つこと、③食性が植物から動物まで非常に幅広いこと、④全国の広い地域に分布しているため他地域との比較ができること等から、森林環境を把握する有力な指標として活用しています。

##### イ 主な取組と調査結果

サンプリング調査は、サポーター活動とプロジェクトの調査が密接にリンクしており、サポーターによる調査が非常に重要な部分を占めています。

平成22年度は、赤谷の日や7月及び11月に行われた連続調査を中心に、赤谷センターも調査を行いました。

その結果、平成22年度のテンのサンプル数は758でした。

採餌傾向としては、例年3～8月は動物類が優占又は多い状態が続き、9～10月期になって植物がやや多くなり、11～12月には植物が優占する傾向にあります。平成22年度もほぼ例年どおりの推移でしたが、7～8月は動物類よりも植物類の方が多くなっており、特徴的な状況を示しました。

採餌動物類は、ほ乳類と昆虫類に集中していました。ほ乳類では、例年同様にネズミ類が最も多い結果となりましたが、イノシシが採餌対象動物として増加する傾向があった点が特徴的でした。

採餌植物類は、ヤマグワ、ウワミズザクラ、サルナシ等23種類で例年とほぼ同様でしたが、特に、サルナシ、ツルウメモドキの2種で全体の約70%を占めていました。なお、この2種の出現回数の経年変化を見ると、サルナシは年々増加傾向にあるのに対し、ツルウメモドキは隔年で増減していました。



サポーターによるサンプリング風景

センサーカメラに写ったホンドテン

## (2) センサーカメラを用いた動物相調査

平成20年度から、赤谷プロジェクトエリア全域の動物相、各種の生育環境及びエリア内の分布状況やそれらの経年変化を把握するため、自然保護協会が中心となって、51箇所の固定点にセンサーカメラを設置しています。

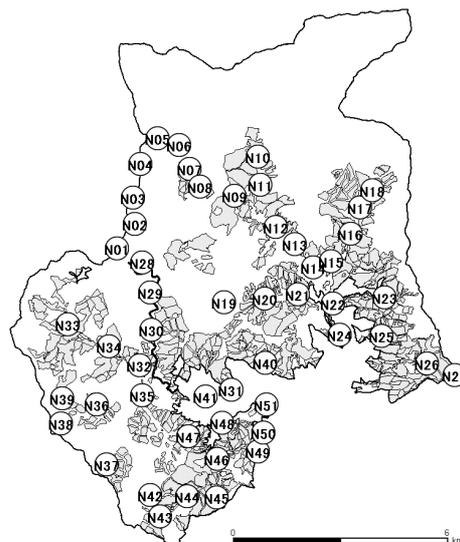
固定点では、毎年一定期間、センサーカメラによる調査を実施しており、平成22年度の調査は8月18日～10月22日及び10月22日～12月2日の2回実施し、赤谷センターもセンサーカメラの回収に協力しました。

撮影されたほ乳類を同定した結果、これまでに19種のほ乳類が確認されました。

特に、コウモリ類、ツキノワグマ、ニホンリス、イノシシは8月に多く10月に少ない傾向が認められました。また、分布地点の変遷を見ると、ニホンジカは、これまで確認されていなかった場所で確認されており、確認された地域が広がっていました。

また、赤谷センターでもいきもの村内にセンサーカメラを2箇所設置しており、ホンダタヌキやコウモリ等が確認されました。

なお、ムササビについては、いきもの村に設置した巣箱を利用していることが明らかとなったことから、センサーカメラを設置したところ、ときどき撮影されました。



センサーカメラ設置点



いきもの村で撮影されたノウサギ（左）とムササビ（右）

### (3) ほ乳類モニタリングWGの活動

赤谷プロジェクトにおけるほ乳類モニタリングの取組について検討するため、平成22年度はWGを計2回開催しました。

WGでは、従来確認されていなかったニホンジカが増えつつあること、ニホンザルやイノシシによる農作物被害が生じていること等について主に意見交換が行われ、今後、赤谷プロジェクトとしてどのような協力ができるか等を検討しました。

なお、2月9日には、「にいはる・けもの会議（仮称）」として、県、町、赤谷プロジェクトの担当で打合せを行い、今後も継続的に情報交換等を行うこととなりました。



WGの様子

### (4) 来年度に向けて

今後も、サポーターを始めとする関係者と連携しつつ、テンのモニタリング調査やセンサーカメラを用いた調査等を通じて、野生動物の生息環境としての望ましい森林の姿を把握していくこととしています。

また、みなかみ町において課題の一つとなっている獣害対策については、県や町と連携し、まずは情報交換から行い、今後プロジェクトとしてどのような取組ができるか検討することとしています。